

## 第105回日本精神神経学会総会

## シンポジウム

精神科医療における非自発的治療および  
行動制限について若手の視点で考える

座長 佐藤 創一郎

精神科医として臨床経験を積んでいく中で、薬物療法や精神療法などの治療技法に関しては学習機会は多くあり、若手の精神科医にとってはそのスキルや知識を自発的に獲得していくことは可能な状況となってきた。しかし、日常臨床の中で避けて通ることのできない非自発的入院治療や行動制限については、精神保健指定医として法律の運用を学ぶ機会は講習会などを通じて可能ではあるものの、実践の場における判断・理念といったことを議論したり、学んだりする機会はあまりない。また、一般的に我が国においては入院病床が他国と比べて多いことや、国際的に批判をうけた人権侵害事件の報道などから、日本の入院精神科医療の水準が低いのではないかと印象が払拭できていない面もある。そのため、2008年秋に東京で開催された第13回環太平洋精神医学会議（PRCP）の際に、NPO法人日本若手精神科医の会（JYPO）を中心に招聘された海外の若手精神科医と行動制限をテーマとするワークショップを開催した。

橋本直樹先生には、そこでの調査結果を基に行動制限に関する国際比較について発表していただいた。また、その後国内での地域差などについて検討する必要があると考え、館農勝先生には平成20年度助成金を受けて執り行われた若手精神科

医を対象とする非自発的入院と行動制限に関する意識調査の結果について報告していただいた。明生病院の趙岳人先生には、実際の臨床現場でしばしば問題となる長期隔離を解消するための取り組みについて自験例の紹介を通して、「診たて」と「手当て」という視点から当事者の状態をとらえ直すことが大切であるという発表をしていただいた。最後に佐藤から特に精神科病院への入院ということそのものが持っているスティグマについて、我々自身が自覚を持ち、回復を目指した治療の場である入院という理念をもって診療に当たり、行動制限を必要とする場面では適切にリーダーシップを医療チームの中で発揮しなくてはならないということを提案させていただいた。

非自発的入院や行動制限という、どちらかといえばオープンに語られにくいテーマについて、若手精神科医が考えるという機会を本学会で認めていただけたことは、これからの精神科医療を担っていくべき若手が直面している問題に対して純粋に検討していくことができるきっかけになったのではないかと、プログラム委員会の先生方のご決断に感謝している。

また、これまでJYPOが企画に関与してきたシンポジウムなどの中でも最も多くの来場者を迎えてセッションを執り行うことができたことに関

しても、JYPOの新しい指導体制の展望の確かさに期待を感じると共に、セッションにご来場いただいた会員の先生方のご期待・ご支援にも改めて感謝を表したい。若手の感じる問題というのは、諸先輩方からみればまだまだ経験不足で頼りない

ものように感じられる部分もあるかと考えているが、そうであるからこそ、若手ならではの取り組みや考察に対する諸先輩からのサポートを今後もいただけることを期待できる流れを生んだシンポジウムであった。

---